

住吉造

住吉大社の4つの本殿は、「住吉造り」と呼ばれる建築様式の典型である。住吉造りが注目されるのは、仏教徒が6世紀にアジア大陸から大工技術や建築様式を取り入れるより前のものだからである。日本の他の神社仏閣は、後から入ってきた様式で建築（または再建）されている。

住吉造の建物は、天皇の即位を祝う神道の儀式である大嘗祭の際に建てられた仮設の神社に似ている。この様式は、古代の宮廷建築にルーツがあると考えられ、お堂の特徴、寸法、入り口、屋根の装飾などの建物の仕様によって定義される。その建物は、シンプルな切妻屋根で、両端に一对の交差した装飾的な2本の柱がある。

入口は片側の破風の下にあり、多くの神社仏閣のように縁側はない。他の様式の神社に見られる、屋根を支える「御柱」がない。内部は、神職が入ることができる外側の部屋と内側の神々のための聖域の2つの空間に分かれている。各本殿の周囲には、聖域とその先の外界を隔てる木の柵が設置されている。

かつては住吉大社の4つの本殿は20年ごとに解体・再建されていた。16世紀の内戦でこの慣習は中断し、19世紀初頭には完全に放棄された。現在の本殿は1810年に建てられたもので、国宝に指定されている。